



institution	広島国際学院大学(Hiroshima Kokusai Gakuin University)
Title	Goodwin, Jeff and Ruth Horowitz, 2002, "Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas of Qualitative Sociology", Qualitative Sociology, 25 : 質的調査法をめぐる諸論点
Author(s)	後藤, 俊文; 打越, 正行; 吉田, 舞
Citation	現代社会学(14): 33-43
URL	<a href="http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/11986">http://harp.lib.hiroshima-u.ac.jp/handle/harp/11986</a>
Rights	

Goodwin, Jeff and Ruth Horowitz, 2002,  
“Introduction: The Methodological Strengths  
and Dilemmas of Qualitative Sociology”,  
*Qualitative Sociology*, 25(1)

— 質的調査法をめぐる諸論点 —

後藤俊文・打越正行・吉田 舞

本稿はグッドウィン (Jeff Goodwin) とホロウィッツ (Ruth Horowitz) によって執筆された「質的社会学における方法論的強みと難点」の論文評である。対象論文ではおもに、3つの論点について議論が展開されている。①質的社会学における「科学性」をめぐる論点である。質的社会学には、他の社会科学とは規準の異なる「科学的」方法論が存在する。②調査における少数事例問題である。質的社会学では、事例の数が少なくとも、包括的な理論を構築することが可能である。③調査者の立ち位置に関する論点である。質的調査を行う者は自らの立ち位置についての自覚的態度が求められる。これらに対して、評者は3つの論点を設定し、回答を試みる。一つ、調査者は「壁のハエ」か、それとも議論の好敵手か。調査者と調査対象者の関係の在り方について検討する。二つ、質的調査か、量的調査か。どちらの調査でもその「科学性」を担保するのは、解釈する理論の妥当性であることを指摘する。三つ、質的調査法の規準を設定すべきか。実体的な規準を設けずに、暫定的に説明し続けることに質的調査法の可能性があることを提起する。

キーワード：質的社会学，調査方法論，少数事例問題

## 1 はじめに

これまで、国内の社会学やその周辺科学では、質的調査法に関する活発な議論が蓄積されてきた(中野 1975a, 1975b; 似田貝 1974, 1977a, 1977b; 宮本・安溪 2008; 中根 1997)<sup>1)</sup>。また、それらの方法論の議論にもとづく、生活史や民族誌も蓄積されつつある(青木 1996; 佐藤 1984)。

他方で海外においても質的調査法をめぐる議論と成果の蓄積がなされている。本稿で扱うジェフ・グッドウィン (Jeff Goodwin) とルース・ホロウィッツ (Ruth Horowitz) による、“Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas of Qualitative Sociology” も、そのひとつである。ここで日本と海外の質的調査法をめぐる議論の詳細を検証することは我々の能力を超えるが、海外の質的調査法をめぐる議論を簡単に整理し、そこから導かれる諸論点を提示することを本稿では目

指したい。

なお執筆にあたっては、1 節・4 節を打越、2 節を後藤、3 節を吉田が担当し、構成や用語の統一は全員で確認した。また上記の論文は、社会理論・動態研究所における外書講読研究会で精読し、理解を共有したうえで本稿の執筆を進めた。

## 2 論文概要

本論文は、質的社会学が社会科学としての科学的妥当性、および信頼性をもつか否かについて、質的社会学を支持する立場から論じられたものである。

以下、本論文でとくに力点が置かれている、質的社会学における「科学性」の問題、少数事例問題 (small-N problem)、調査者の立ち位置の問題の3点を中心に、著者たちの議論を紹介する。

### 2.1 質的社会学に対する疑念

グッドウィンとホロウィッツによれば、多くの研究者（そのなかには当の質的研究者も含まれる）は質的社会学の方法論的厳格さを疑い、その研究成果の信頼性を認めてこなかった。質的社会学は、読者にとって興味深いエピソードを拾い上げてくることに長けている。しかし、それは往々にして場当たりの記述にとどまり、一定の理論にもとづいた厳密な方法で分析されることはない。できることといえば、せいぜい仮説の提示ぐらいであり、持ち帰ったデータを科学的に検証したり、ましては既存の理論を修正したり新たな理論を構築したりすることなどは到底期待できないとみなされてきた。質的社会学は、社会科学として自立しておらず、量的社会学のように明晰な論理で組み立てられた研究の助けを請わなければならない。このような見方が、著者らをはじめ、質的社会学者を長年悩ませてきたということである。

### 2.2 質的社会学における「科学性」

このような批判に対してグッドウィンとホロウィッツは、質的研究も量的研究と同じほど（あるいはそれ以上）に方法論的に厳格で論理的な規準に立って調査を進める準備があると主張する。その一つとして著者らが挙げたのがゲイリー・キング (Gary King)、ロバート・コヘイン (Robert Keohane)、シドニー・バーバ (Sidney Verba) (以下、KKV) の『社会科学のリサーチデザイン——定性的研究における科学的推論』(1994=2004) である。この著作でKKVは、質的社会学がより厳格で科学的方法にもとづいたものにするために、可能な限り量的調査の規準を取り入れなければならないとする。グッドウィンとホロウィッツによれば、KKVの著作から引き出された科学的厳格さのための規準は10項目にのぼる。一例を挙げると、①反証可能な理論を立てること、②自己矛盾していない理論を立てること、③従属変数は被説明変数であり、両者を取り違えてはならないこと、④(理論を構築するときは)より簡潔な理論でより普遍的な事象を説明するよう心掛けること、⑤すべてのデータと分析は、可能な限り再検証が可能なこと、というものである。

KKVの示した規準に対してグッドウィンとホロウィッツは、各項目の妥当性について受け入れるものの、全体としてこれらを質的研究の「科学性」の規準とするには困難であるとみる。ひとつ

には、質的研究者が対象としようとするものの多くが文脈依存的な出来事であることと関係する。ある特定の歴史的流れのなかの、ある特定の場所で引き起こされる社会的出来事（社会関係、文化、組織、運動）の意味について、質的研究者は可能な限り接近し、そこで得られること事細かなデータから解明を試みる。よって、先のKKVの規準に照らせば、質的研究の多くがこのルールを侵していることになる。例えば、質的研究は独立変数よりも従属変数、つまり事例そのものに焦点を当てる傾向にあること（③の違反）、刻々と変わりゆく社会関係のなかに調査者が身を置き、そこで目にする出来事をかれ自身が記述し検証すること（⑤の違反）などである。グッドウィンとホロウィッツによれば、質的社会学者とそれ以外の「科学的」な研究者との間では、それぞれが関心を寄せる「変数」に対する姿勢が異なるため、KKVが提示するような規準で質的社会学の「科学性」を評価することは困難である。

### 2.3 少数事例の問題

KKVは先の規準のなかで、理論の構築とは簡素な形式で普遍的な事象を説明するものでなくてはならない（④）と説いているが、これも質的社会学に欠ける要素として常に寄せられてきた批判の一つである。対象とする事例に自ら赴き、人びとの間で複雑な社会関係を記述しその意味を明らかにしたとしても、多くの場合、そこから導き出される含意をそれ以外の社会的文脈で生じる出来事の分析にそのまま用いることは意味をなさない。優れたエスノグラフィーはそこで暮らす人びとの意味世界や生活世界についての理論的インプリケーションを提示するものの、それを社会的背景の異なる別の場面で援用することは難しい。文化的・歴史的な差異にこそ研究者のまなざしが向かいがちな質的社会学では、他の社会科学と比べ、一般理論の構築に対する考え方が異なる。

少ない事例に特化し、より広範な社会的世界の説明が手薄になっていることは、一般的に質的社会学が抱える少数事例問題と呼ばれる。量的研究のようにマクロな統計調査をしたり、一定範囲の比較調査を実施することで理論を構築する手法と異なり、質的研究ではある社会的出来事がどのような文脈のなかから生じ、発展してきたかを種々のデータから解明し、そこから理論を立ち上げる。そのため、質的研究は一事例を超えた一般的な説明枠組みを打ち出すことには向いていないかもしれない。

しかしながら、グッドウィンとホロウィッツは理論を構築することにおいて「事例が少ないことは問題ではない」と述べる（Goodwin and Horowitz 2002: 37）。分析する事例の数は、明らかにする現象の内容しだいである。分析に関する一般的な想定とは反対に、現象のある一点に光を集中させ、そこから導き出される意味にもとづき理論を構築していく方が、より包括的に物事を説明できる場合がある、と著者たちは述べる（事例が少数にもかかわらず影響力のある理論を打ち立てた著作として、ペリー・アンダーソン（Perry Anderson）の『絶対主義国家の系譜』、ダグ・マカダム（Doug McAdam）の『黒人反乱における政治的プロセスと展開——1930-1970年』が挙げられている）。

### 2.4 調査者の立ち位置の問題

上記2つの問題は、質的研究の外部からの批判に応じて考察されたものである。第3の問題は、反対に質的社会学内部からわき起こった議論であり、1970年代以降、盛んに論じられるようになって

た話題である。

グッドウィンとホロウィッツによれば、伝統的に質的研究の信頼性、つまり収集されたデータの実証やその解釈の「客観性」を担保していたのは、研究者そのものの社会的地位と調査にかけた時間と労力であった。調査研究について技術を学び、大学で職を得ている研究者が目撃したものに対して疑いをもたれることのない時代があった。研究者は習得した調査技術をたずさえフィールドへ赴き、調査対象に自らの存在が影響を与えないよう「壁に張り付いたハエ (fly on the wall)」のごとく観察することが現地調査の常識とされた。

しかしながら、調査者がもち帰るデータそのものの「客観性」について疑義をとる議論が活発化してくると、質的研究者は自らの調査の方法論に関して無自覚でいられなくなった。具体的には3つの事柄に注目が集まった。第1に、調査者と調査対象者との関係性について、調査者と調査対象者は社会的地位において対称的ではない。調査対象者は常に観察され記述される客体であり、主体はあくまで調査者（それも多くの場合、大学という権威に所属する）である。そこにはおのずと権力の問題が入り込み、あるがままの中立的なデータが存在するという前提に対し疑念がもたれるようになった。さらに、多くの場合、調査者は調査対象と相互行為しながらデータを収集する（その主たる例がインタビューである）。この時、権力あるいは立場の非対称性は収集されるデータに決定的な影響を与える。調査者は自分がどのような立場で対象と接し、そこでどのような役回りを演じたかについてより自覚的にならなくてはならないと主張されるようになった。

第2に、調査対象内部の差異について、収集されるデータは調査者がどの対象と密に関係をもったかによって左右される。例えば組織文化について研究をするとき、調査者がどのポジションにいる人物に焦点を当てるかで分析結果は大きく異なってくる。ある現象を明らかにするためにある特定の人物の認識を媒介しなければならないとき、調査者は構造的なバイアス（立場によって異なる見方）に気を配らなければならない。つまり、調査者はその研究で誰と接触したかについて著作のなかで示さなければいけない。

第3は、調査行為そのものが政治性から逃れられないことに関係する。質的調査における権力の問題に意識が集まりはじめてから、調査者は対象との関係において中立的な存在ではないことが常識となり、調査者自身のバイアスに対する自覚が求められるようになった。調査そのものが暗に有するジェンダー・バイアスや自民族中心主義の認識に対して注意が払われるようになり、誰のため、何のための研究なのかが問われるようになった。

これらの課題に対するグッドウィンとホロウィッツの処方箋はきわめてシンプルである。すなわち、「著者は（可能な限り）自らの立場や認識的偏りについて著作のなかで明確に示すこと」（Goodwin and Horowitz 2002: 40）というものである。この回答に対する研究者の議論はいまだ続いており、とくに調査者自身に関して、どのような内容をどの程度提示すればよいかといったことについて、いまだ意見の一致には至っていない。しかし現在では、質的研究に対するかつての素朴な評価と異なり、調査および調査者に関してもそれが重要な「変数」として研究結果を規定しているとの見方が一般的になっている。調査者は程度の差はあれ、「私 (I)」についてその著作のなかで語ることを余儀なくされている。質的社会学において、調査者はその事例研究のなかの重要な登場人物の一人なのである（この問題に関する好例として著者たちは、マイケル・シュオルブ (Michael Schwalbe) の『鉄の檻の開放——メンズ・ムーブメント、ジェンダー・ポリティクス、アメリカ文化』とポール・ウィリス (Paul Willis) の『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗、労働への順応』を挙げる)。

以上が本論文の概要である。まず、質的社会学における「科学性」とはいかなるものかが問われた。次に、少数事例問題について問われた。最後に、調査者の立ち位置に関する問題が提起された。これらに対する著者たちの回答は、質的社会学は他の社会科学とは規準の異なる方法論を独自にもち、それはある社会的出来事についての理解をその社会的背景に沿ったかたちで可能としてくれるものであること。取り上げる事例の数は、検証しようとする現象の内容しだいであり、たとえ少ない事例であっても包括的な理論を構築することは可能であること。質的調査を行う者は自らの立ち位置についてより自覚的になるべきであり、自らの存在が収集されるデータを強く規定していることに意識的になること、というものであった。

以下では、本論文で提示された質的研究の方法論について、同じように質的調査法を用いている研究者の立場から考察を行う。

### 3 論点 I : 質的調査法をめぐる 2 つのジレンマ

#### 3.1 調査者は「壁のハエ」か、議論の好敵手か

表題にあるように、グッドウィンとホロウィッツは、質的研究が「科学的」研究であることを説明するため、質的研究がもつ方法的なジレンマについて考察している。ここでは、その一つとして、質的研究において、調査者が調査対象者や読者に自己を表出すべきか否かの問題についてみていきたい。グッドウィンとホロウィッツは、質的研究の長所として、「目前の現実にはできるだけ近くにわが身を寄せて、それを理解しようとする (Goodwin and Horowitz 2002: 36)」ことにある点を挙げている。しかし評者の見解では、調査対象者への「わが身の寄せ方」や、論文の中でどこまで調査者自身の存在を表に出すかは、一様ではない。調査者対象者に対して距離をとるか、対象者の集団に深く入り込むか、さらに、論文の中で調査者の姿を読者に示すか否か、そのどれが適切かを一義的に決めることはできない。本論文では、調査者が対象者を中立的・客観的に観察する伝統的な調査スタイルを打ち破った事例として、シュオルブとウィリスの調査方法が紹介されている。シュオルブは、「場への積極的な参加者として自己を呈示 (Goodwin and Horowitz 2002: 41)」することにより、調査対象者の行為の意味や思考をとらえようとした。ウィリスも、調査対象者の世界に入り込むことにより、「野郎ども」の行為の意味を理解しようとした。

グッドウィンとホロウィッツは、調査者が読者に対して、自らの関わり方を出すべきであると述べる。それは、たとえ調査者が自己を表出せずとも、調査者は、調査対象者との関係性を消去することはできないからである。そして、その関係性は、つねに調査対象者の言動や、調査者自身の分析方法に影響を与えている。グッドウィンとホロウィッツは、読者に対して自己を表出しない調査者のことを「壁に張り付いたハエ」のようだと表現しているが、調査対象者に対して調査者が「ハエ」のように関わることについてはあまり詳述していない。しかし、調査者が調査対象者に対して「ハエ」となる調査方法は、かならずしも質的調査の「悪しき慣習」などではなく、有効なデータを得るための積極的な調査方法の一つとなることもある。たとえば、評者はフィリピンの都市部で先住民の調査をしているが、特に路上で調査をする際、物売りや物乞いが通行人と行う交渉や、調査対象者らの非先住民に対する態度を知るために、調査者であることを告げず「ハエ」になったほうが、有効な情報を得ることができる。

また、グッドウィンとホロウィッツの議論では、「質的研究には対象への長期の関与」が前提とされている。しかし、質的研究はつねに長期に調査対象者に関与するとは限らない。たとえばホームレスや物乞いで生計を立てている人びとは、警察の取り締まりや、通行人の様子、収入獲得のチャンスに合わせて、たえず場所を移動している。そのため話を聞いた人に、「だいたい、いつもこの辺りにいる」と言われても、次に行った時に会える保証はまったくない。しかし、たとえ一回限りの聞き取りであろうと、また、調査者がホームレスに自己を明かさないとしても、仕事や生活についての話や仲間とのやり取りなどから、「生きられた世界」を知ることは十分に可能である<sup>2)</sup>。

調査者が調査対象者と初対面である場合、得られるデータに信頼を置けないこともある。逆に、見知らぬ他人だからこそ見聞きできることもある。調査対象者と長期に関わる場合、得られた情報の信頼性はより高まるかもしれない。しかし、グッドウィンとホロウィッツがいうように、「質的研究のもっとも優れた点は、語りや分析に含まれる豊かなニュアンスを取り出すことにある (Goodwin and Horowitz 2002: 44)」。調査者は、得られる情報の信頼性を技術的にいかに高めるかという問題だけではなく、自らの調査対象者との関係と、自らの存在が調査対象者に与える影響を対象化しつつ、語りや行為のより深層の意味を汲み取る努力をしなければならない。

この点について、もう一つの事例を紹介する。以前、ホームレスの調査をしている研究者の間で、「フィリピンのホームレスは、どうして微笑むことができるのか」について、議論になったことがある。日本のホームレスに比べ、フィリピンのホームレスには「フレンドリー」に自分の経験を話してくれる人が多い。その理由として、フィリピンのホームレスは、日本のホームレスと比べて家族や社会とのつながりがより強いのではないかという意見が出た。日本のホームレスには単身者が多いのに対して、フィリピンのホームレスには若年・中年、家族連れの人が多い。また、日本のホームレスには家族や親族との関係を切断していることが多いのに対して、フィリピンのホームレスには路上でも家族や親族とネットワークを維持している人が多い。そのため彼／彼女らは、精神的に、見知らぬ他人とさえ関わりをもつ余裕のある人が多い。つまり彼／彼女らは、日本のホームレスよりも社会的な孤立の度合いが小さい (青木 2012: 139)。このように、調査対象者の「微笑み」や「フレンドリーな振る舞い」を理解するには、彼／彼女らが置かれている社会的境遇の違いが大きく関わってくる。しかしこの場合、そのことと合わせて、調査者のホームレスに対する立ち位置 (positionality) に着目する必要も生じてくる。フィリピンのホームレスに話しかける「私」(評者)は、調査者であり、外国人であり、路上生活者ではない。また、炊き出しの場で観察やインタビューを行い、主催側の関係者と話をする「私」は、ホームレスの人びとからは、たんなる外国人ではない「支援者」として認知される。そのため、彼／彼女らのなかには、「私」と言葉を交わさなくとも、ニコニコと会釈をしたり、すすんで路上での生活について話をしてくれる人がいる。ある日、炊き出しの場で、目が合い、「私」に対してにっこりと会釈をしてくれた女性がいた。その後、彼女は、次の炊き出しに移動する様子だった。「私」もその場を出て、ジプニー (相乗りバス) に乗った。するとそこに、小さくなって座っている女性がいた。彼女は、炊き出しの場で「私」に微笑んでくれた女性だった。しかし、「私」が話しかけようとする、彼女はすぐ目を逸らして下を向いた。彼女が目を逸らしたのは、無賃乗車をしているために、人に気づかれなくなかったのかもしれない。つまり、先に「私」は、ホームレスのボランティアと思われて、彼女の方から微笑んで会釈されたが、ジープの中では、彼女にとって「私」は乗客の一人であったことが分かる。炊き出しの場で「ボランティア」と見られた「私」は、この時、「壁に張り付いたハエ」となった。もとより、ホーム

レスは、炊き出しの場でも、調査者またはボランティアである「私」に、心を開いてくれたわけではない。そのことは、炊き出しの場を出てわずか5分後には、「私」は顔を忘れられていたことから分かる。炊き出しの場で、「ボランティア」と「フレンドリーな」関係を装うことも、ホームレスにとっては生きるための「人間関係」の作り方なのかもしれない。ゆえに、調査対象者との距離がどうあれ、調査者が調査の「場」にいること自体が、「日常性の政治に対するポリティカルな介入として位置づけ（山田 2000: 77）」られる。そして、場の文脈にあって、「刻々と変わる権力作用の編成において、調査者の位置づけを読み解いていく醒めた認識（山田 2000: 77）」を持つことで、よりたしかなデータを読者に呈示することが可能になる。

### 3.2 質的調査か、量的調査か

最後に、本論文では、質的調査はいかに「科学化」できるかが議論され、「フィールドワークを社会統計学に比肩する客観性や科学性を持つものとして位置づける動き」（山田 2000: 64）がみられた。グッドウィンとホロウィッツは、KKVらが提示した質的調査の「科学化のルール」を一部承認しながら、質的調査においても、量的研究では捉えきれない「生きられた世界」について、厳格な方法論を援用しなければならないと主張した。また、いくつかの先行研究を紹介しながら、限られた数の事例から「世界のできるだけ多くのことを説明する」ために、既存の理論を援用したり、新たなデータを取り込むための概念を構成したり、そこから新たな理論を導出する方法や過程を紹介した。私は、これまでフィリピン先住民のアエタ（Aeta）の集落で調査を行ってきたが、そこで問われることは、アエタの境遇が他の先住民とどこが違うのか、あるいはアエタがフィリピンの先住民をどれほど代表できるのかというものである。これに応えるには、調査事例を増やし、アエタの一般性や個別性を明らかにする方法がある。事例は少ないよりも多い方が説得力のあるものとなり、他の研究に複製可能なものとなる可能性も高い。しかし、特定の調査対象者（地）に着目し、その事例の個別性を踏まえ、それを類型に高め、他の類型と比較する方法を取ることで、一般理論に繋がる主張や概念を導出することも可能である。このように「少ない事例により事象がしっかり理解できるなら、いわゆる『少数事例問題』が問題になることはない」（Goodwin and Horowitz 2002: 37）だろう。特定の事例を、一般理論や大きな物語に結びつけるのに重要なのは、事例の数よりも、むしろ事例を分析し解釈する方法（理論）である。

## 4 論点Ⅱ：質的調査法の規準を設定すべきか？

ここでは、質的調査法が科学的水準を高めるための規準の設定について検証してみたい。まずはグッドウィンとホロウィッツの主張を確認する。

質的研究的方法的な規準は発展し続けており、今日では、それらすべて、どのように厳密さを高めるかにかかっている。研究者が研究対象にどこまで関与すべきか、データの収集にどれほど影響を与えているかについて（それは調査者と調査対象者の力関係の差異や両者それぞれの特徴に規定されるが）、意見はさまざまである。しかし、伝統的な方法論的規準に、変らないものもある。それは、質的研究には対象への長期の関与が必要とされるが、そのことで、豊富で複雑な中身か



らなる社会生活へ接近することが可能になっている、ということである。(Goodwin and Horowitz 2002: 45)

グッドウィンとホロウィッツの議論では、質的調査法の方法論的規準として「対象への長期の関与」が想定されており、それによって「豊富で複雑な中身からなる社会生活へ接近」ができるという。対象への長期の関与が必ずしも質的調査法の規準とはならないことは、上で吉田が述べたとおりである。よって、ここではそのような質的調査法の規準を設定することについて検証したい。つまり、「調査対象者への長期にわたる関与」でも、この他にも例えば「調査対象者との親密なラポールの蓄積」(Goodwin and Horowitz 2002: 40)や「調査対象者の全体的理解」(Goodwin and Horowitz 2002: 36)でも、どのような規準であれ、それを実体的に設けることは、規準を満たさないふるまいや語りを捨象することになるのではなかろうか、ということについて考えてみたい。結論から述べれば、質的調査法における「科学性」の担保は、際限のない説明でしか、達成できないと評者は考える。調査者による解釈の妥当性を高める際に、量的調査法が数字を用いるのに対して、質的調査法は言語を用いる。数字も言語も用いるのは調査者であり、その点では両者ともに調査者の文脈に依存することは避けられない。ゆえに質的調査法の規準も、原理的に暫定的なものである。ここで、具体例を2つあげる。

1つ、調査場面における調査対象者のいわゆる「嘘」の問題がある(岸 2008)。調査対象者が「史実性」とは異なる出来事を語った際に、調査者はそれをいかに解釈するのか。まず、つじつまが合わないことこそ、社会学的に重要な意味があると解釈できる。また、一見すると調査者にはつじつまが合わないようにみえるふるまいや語りが実際、調査対象者にはつじつまが合うような説明図式が存在するとの解釈も可能である。質的データをめぐっては、史実性とは合致しない調査対象者による「嘘」を安易に却下することなく慎重に解釈をすすめる必要がある。

2つ、調査対象者の「声にならない声」の問題がある(宮内 2009)。宮内洋は宮地尚子の「環状島モデル」(宮地 2007)を援用し、当事者こそが直面する問題について語ることができると想定しがちな従来の前提に疑義を示し、むしろ社会問題の渦中にある当事者が語ることは困難であることを指摘する(宮内 2010)。調査場面における調査対象者の沈黙、発狂、ため息などの声にさえならない声や感情に調査者はどのようにアプローチが可能なのか。全体的理解といった規準を設ければ、残念ながらこれらの「非科学的な声」は捨象されてしまう。そうではなく、これらの声を科学することに質的調査法の技術と議論は焦点をおく必要があるだろう。

このように史実性と合致しない「嘘」や、語りの残余物としての沈黙、発狂、ため息などは、これまで質的調査研究においても中心的に扱われてこなかった。なぜなら、これらを解釈する際に、史実性と合致し、直面する出来事を矛盾なく語りうる能力を持つ人間像が想定されてきたためである。そしてこれらの歴史を語る主体に対しては、厳しい批判がなされてきた(Spivak 1988=1998)。このような議論を踏まえて、質的調査法の方法論的規準は明確に設定せず、絶えず説明を試み、その「科学性」をメンテナンスすることこそ、社会学における質的調査法の可能性は拡がると評者は考える。言語をその解釈の深化に用いてきた質的調査法は、ここで新たな課題に直面する。それは、言語にならない言動を言語で解釈すること、もしくは非科学的な言動を科学するという矛盾にどのように応答することができるだろうか、というものである。もちろん、あらゆる資料、史料などを総動員して質的データを解釈することはいうまでもない(朴 2011)。重要なのは、それらによって

解釈が困難なデータを解釈のするための方法論の蓄積と拡張である。

以上の議論をみるかぎり、国内における社会学やその周辺科学における質的調査法の議論は海外のそれと、それほどそん色ない議論の蓄積がなされてきたように思われる。そうであるならば、次はそれらの議論によって研ぎ澄まされた質的調査法を用いた、調査研究の蓄積が求められる。調査法にまつわる議論を展開させることは、社会学やその周辺科学において欠かせない作業である。だからこそ、その質的調査法という道具で、明確な問題意識にもとづいて調査対象にアプローチする必要がある。調査対象を「料理」することによって、またその道具もその切れ味を磨くことになるだろう。

#### [注]

- 1) 質的調査法に関する初学者用のテキストも数多く出版されている（佐藤 1992; 谷 1996; 桜井 2002）。
- 2) ただし、調査であることを相手に伝えていない場合は、相手の話をどこまで、どのように公開するかという倫理的な問題がより大きくなる。

#### [参考文献]

- 青木秀男, 1996, 「都市下層と生活史法」 谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社, 125-48.
- , 2012, 「ホームレスの国際比較のための方法序説——フィリピン, 日本, アメリカを事例に」『理論と動態』5: 128-49.
- Goodwin, Jeff and Ruth Horowitz, 2002, "Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas of Qualitative Sociology", *Qualitative Sociology*, 25(1): 33-47.
- King, Gary, Robert O. Keohane and Sidney Verba, 1994, *Designing Social Inquiry: Scientific Inference in Qualitative Research*, Princeton University Press. (=2004, 真淵勝訳『社会科学のリサーチ・デザイン——定性的研究における科学的推論』勁草書房.)
- 岸政彦, 2008, 「語りの余剰と生活史」『市大社会学』9: 101-21.
- 宮地尚子, 2007, 『環状島＝トラウマの地政学』みすず書房.
- 宮本常一・安溪遊地, 2008, 『調査されるという迷惑——フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版.
- 宮内洋, 2009, 「インタビューにおける語りの扱いの相違——ある女性の〈非科学的〉な語りをもとに」『質的心理学フォーラム』1: 58-65.
- , 2010, 「〈当事者〉研究の新たなモデルの構築に向けて——『環状島モデル』をもとに」宮内洋・好井裕明編『〈当事者〉をめぐる社会学——調査での出会いを通じて』北大路書房, 183-204.
- 中根光敏, 1997, 「ラポールという病——社会学的暴力を引き受けるために」『社会学者は2度ベルを鳴らす——閉塞する社会空間／溶解する自己』松籟社, 26-51.
- 中野卓, 1975a, 「歴史社会学と現代社会（一）」『未来』未来社, 101: 2-7.
- , 1975b, 「社会科学的調査における被調査者との所謂『共同行為』について」『未来』未来社, 102: 28-33.
- 似田貝香門, 1974, 「社会調査の曲がり角——住民運動調査後の覚え書き」『UP』東京大学出版会, 24: 1-7.
- , 1977a, 「運動者の総括と研究者の主体性（上）」『UP』東京大学出版会, 55: 28-31.
- , 1977b, 「運動者の総括と研究者の主体性（下）」『UP』東京大学出版会, 56: 22-26.
- 朴沙羅, 2011, 「物語から歴史へ——社会学的オーラルヒストリー研究の試み」『ソシオロジ』56(1): 39-54.

Rubin, H.J. and I. S. Rubin, 2005, *Qualitative Interviewing: The Art of Hearing Data Second Edition*, London, Sage Publication.

桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.

佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー——モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社.

——, 1992, 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』新曜社.

Spivak, G. C., 1988, "Can the Subaltern Speak?", Cary Nelson and Lawrence Grossberg eds., *Marxism and the Interpretation of Culture*, University of Illinois Press. (=1998, 上村忠男訳『サバルタンは語ることができるか』みすず書房.)

谷富夫編, 1996, 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社.

山田富秋, 2000, 「フィールドワークのポリティックス」桜井厚ほか編『フィールドワークの経験』せりか書房.

(ごとう・としふみ 社会理論・動態研究所)

(うちこし・まさゆき 社会理論・動態研究所)

(よしだ・まい 首都大学東京大学院博士後期課程)

**Book Review: Goodwin, Jeff and Ruth Horowitz, 2002,  
“Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas  
of Qualitative Sociology”,  
*Qualitative Sociology*, 25(1)  
Issues on Qualitative Research Methods**

**Toshifumi GOTO**

**Masayuki UCHIKOSHI**

**Mai YOSHIDA**

This paper is a review of “Introduction: The Methodological Strengths and Dilemmas of Qualitative Sociology” written by Jeff Goodwin and Ruth Horowitz. They discussed three methodological dilemmas in qualitative sociology: Firstly, the dilemma of “scientific” methodology in qualitative sociology. Qualitative sociology has its own rigorous standards different from those of other social sciences. Secondly, the dilemma of “small-N problem”. Even when there is only small number of cases, encompassing theories could be built with close engagement with specific cases. Thirdly, the critical reflection upon the positionalities of the researcher and informant. The researcher using the qualitative method needs to be more reflective in their position during observation or while interpreting cases.

While reflecting on our own fieldworks, we pointed out three issues from the discussion of Goodwin and Horowitz. Firstly, we reviewed the methodological strengths and limitations of participant observation. We addressed the strengths and the limitations of deep involvement of researchers in the studied field. To discuss the influence of researchers in the field, we also reviewed the relationship between researchers and informants. Secondly, we discussed about the “scientific” examination of social phenomena. The point of being “scientific” is not in the qualitative or quantitative. But the most important point is how the researchers use the theories to make their case persuasive and influential. Thirdly, we pointed out the issue of setting methodological standards for “scientific” qualitative research. Even researchers set the substantial standards or not, every analysis is contextualized by the researcher. From this point of view, qualitative research can be “scientific” by explaining social phenomena without relying on formal standards.

**Keywords: qualitative sociology, research methodology, small-N problem**